

「沖縄の声と現実」

2021年06月22日

『週刊金曜日』の6月18日号の「言葉の広場」に掲載された沖縄の西明雄氏の「本土のみなさまへ 沖縄は問う」の投書に心が痛んだ。西氏は沖縄が受けた苦悩を列挙している。

- 1) 1609年から270年間、薩摩の琉球支配を受け、過酷な徴税を課された。
- 2) 先の大戦で本土防衛のため捨て石にされ、民間人10万余を含む20万余の犠牲者を出した。
- 3) 「沖縄を25ないし50年、あるいは、それ以上軍事占領を希望する」との昭和天皇メッセージにより27年間も米国に統治され、県民の命や人権は虫ケラ同然に扱われた。
- 4) 本土の人たちの米軍基地反対運動により、山梨や岐阜県にあった基地が沖縄に移住された。
- 5) 戦後76年、沖縄が本土に復帰して49年経ても、国土の0.6%にすぎぬ沖縄に、米軍専用基地の70.3%が押し付けられている。
- 6) 沖縄経済に占める基地経済の割合は6%に過ぎない。
- 7) 本土復帰から2014年までに米軍関係の事件と事故が約6000件も起き、そのうち凶悪事件が571件、強かん事件が未遂も含め、検挙されただけで129件起きている。
- 8) 沖縄県民は、各種選挙や県民投票で名護市辺野古での新基地建設に明確に拒否しているのに、自公政権は民意を完全に無視して新基地建設を強行している。
- 9) その基地建設が当初計画の約2.7倍の9300億円余となり、深さ90mに及ぶ軟弱地盤の発覚で、県は2兆5500億円に膨れ上がると試算している。西氏は沖縄の歴史と現実を事実即して書き、下記のように訴えている。「これらの事実をご存じの方は他の都道府県にどのくらいいるのだろう。本土の人たちの無関心さや利己主義が沖縄差別政策を支え、県民に犠牲を強いていることに気づいてほしい。『日米安保が大切』というならば、米軍基地も平等に引き受け、爆音禍や米兵による事件・事故も甘んじて引き受ける。それが、人の取るべき道ではないか。」本土の我々は人の道を外れ、沖縄の犠牲の上で平和を甘受してきたと言わざるを得ない。

沖縄で起こっている最近の出来事にも、心が痛む。辺野古新基地の埋め立てに、沖縄戦の激戦地であった本島南部の土砂を調達すると言う。この土地には、戦没者の遺骨が混じっている。40年近く、遺骨収集を続けているボランティア団体「ガマフヤー」代表の具志堅隆松氏は「遺骨眠る土で基地を作るな」と、ハンガーストライキで抗議し、中止する運動を展開している。過酷な戦争を体験し、行き方知れずで埋もれた遺骨を含む土で新基地建設が作られることは、戦没死者への許されない冒瀆ではないか。宮城秋乃氏はチョウ類研究者で、沖縄島北部の「やんばる」の森、元米軍北部訓練場だった所を歩き回っている。米軍から返還された地で見つけた米軍の廃棄物を、捨てた責任者に返すつもりでメインゲート前に置いた。ところが、この行為が交通の妨害に当たる「威力業務妨害」だと言われ、警察から家宅捜索を受けた。蔵書をカメラで撮られ、ビデオカメラやパソコン、携帯電話などを押収された。「米軍キャンプ・シュワブ」ゲート前での座り込みは2500日以上続いている。ある婦人が夫と共に辺野古の座り込みに行った。機動隊の人が来て、立つように言われたが、立てないので、彼の肩に手を置いたところ、「たたいたでしょう」と激高された。「公務執行妨害」で警察に連行され、取り調べを受けた時、怒りを込め「私を逮捕するより、アベを逮捕すべきでしよう？」と言った。2日、警察に留め置かれ、尋問された。沖縄では、県民へのこのような考えられない仕打ちがなされている。

基地と原発の周辺は国家の管理の下に置くという「土地規制法」が可決された。多くの基地を持つ沖縄県民は厳しい管理を受ける現実と直面している。また、中国と台湾の緊張が、奄美大島から南の沖縄の島々に自衛隊基地を作り、ミサイル基地や弾薬庫の建設を急がせている。これ以上の犠牲を沖縄に負わせてはならないと、切に願う。